春の図の巻

昭和廿年
三月廿五日

春の図の格子もゑし初燒　村
ひとかゝえ赤き花の万両　漢人
笑ひ合ひ花負つかぎらん　村
梢の鳥影　尚したり　哉
月の星にかくれもせんと歩を早め　村
草ぬすむ犬は惜しまるゝ　やゝ
活きゆく家の世の道さまざまに　人
雪ふる
下宿をさるのすゝ神の市　人
坂の上にひよつこり平士が見ゆるなり　村
一むねとゞかし　後ゆかるる故の　雪
雪ふるかはす彩のほのまなく　村
人の中に　俳あり　村
ひさまつる赤い弧の一ふさ　雪
旅籠屋やめて閑々なる月　人
熟ゆきもぐき　柿の減りくる　村
小説の想ふや成りぬる　や
たゞ過ぐる名残なる星の花吹雪　せ
秋来つき　寝疲れ　人
夢覚ざこうわる年の明ふ　雪

胸とゞろかし封をかる文
蛍火に見かはす顔のほのぼのと
心の中に瀬あり淵あり　人

ひたすらに虚蔵の馬を作りつゝ　せ
颱風の颱風眠のしづけさよ
千相見の行燈暗き月の下

（お趣の「蛍火」に月かアと思ひ、「月」次かに「こぼして」とあるが、（お伺上げなんて）その方を「雪」事なれば、雪の花吹雪と）

雪の夜の月をうねる土の防波堤　村
はらからがみんな疎開を二祥かりて雪ふる
何か居るらし　騒やぐ葉敷　人

三人の間者の報せ食ひ違ひ
夕影のそこはかとなき旅衣　せ
いとほしき君逃げれば身も細る

（いせ文さうし他人を宿し乱れ飛びます、だらし迷ひを白は人を白日かり他人ひ乱れ飛ぶ）

杉戸あれば黒き御仏　雪
三人目にはじめて男の子生まれたる　村
（元孫のお幻お侍り付きあざか）
蜂の口いつも軽くてせ
（これも付き合ざきまれど）

駒の嘶　この方委句には
よいが第三には元のまゝよきか）

華く馬のゆく立　哉せ

（駒の嘶　この方委句には
よいが第三には元のまゝよきか）

米山合聖の家に借りて来て　芳什

駅路を知らぬ
こゝらあたり
鉈屑拾ひて
溝川の小橋
子供らを夕
三ツ物
そゝろ
ふるさとの野
二人の
はるれそめ
ある時は山の
伊勢の大
歳旦三ツ物
初富士のか
輪飾したる自動車の行く
内孫に男の子産れて春明けて
（春来るは春かに方遠追ちたん）

三嶋祭と知らで来し月（素）
一雁の棹端が折るは凶なりと（人）
夜長を灯る魔術師の窓
性の実一つ載せる掌　（せ）
朝顔の花小さくなりゆく

三ツ物
そゝろ露けき料紙筆硯　漢人
ふるさとの野末の秋のいかならん　哉せ
離山そめにし人の横顔　哉せ
或る時は山のかなたの恋を追ひ　漢人

又富士山今行くる出出まれば美一
かつらぎ　（お明け春つて）

（この沖野書故の面倒
ます、又この辺にはいとも、皆様にはいかがでしょうか。）

生徒今日は神に参拝をなさ
ものに妙評

郵便はがき

神大示川様
二宮町上町九一
高橋香村様

東京都千代田区九段三百十番地
財団法人養和会九段診療所
醫師　佐藤要人

東京都千代田区九段三百十番地
財団法人養和会九段診療所
醫師　佐藤要人

東京都千代田区九段三百十番地
財団法人養和会九段診療所
醫師　佐藤要人

十一月三十日